

石神遺跡 SK1244・1245・1246・1247 出土の土器群

—石神遺跡第7次

1 はじめに

現在、考古第二研究室では石神遺跡出土品をはじめとした飛鳥時代の土器の再整理と調査研究を進めている。今回はその一環として、石神遺跡第7次調査で検出した土坑SK1244・1245・1246・1247（以下、SK1244～1247とする）出土土器の報告をおこなう。

2 出土遺構

SK1244～1247は、第7次調査区西端から約15m東の調査区南辺付近に位置する4基の不整形土坑である。第7次調査区の西部には、天武朝の大規模な改修にともなう盛土と理解されているB期整地土¹⁾が広がっていることを確認している（図160）。整理作業を進めるにあたって、B期整地土の分布状況と調査日誌の記述を照合し、SK1244～1247はB期整地土の上面から掘り込まれた遺構であると判断した。各土坑の規模は以下のとおりである。

SK1244…東西1.7m、南北3.2m、残存深度0.4m。

SK1245…東西2.8m、南北3.2m、残存深度0.4m。

SK1246…東西1.8m、南北3.2m、残存深度1.0m。

SK1247…東西1.8m、南北1.8m、残存深度0.9m。

この4基は平面的重複関係にあり、SK1244とSK1245が掘り込まれた後、SK1244の南端とSK1245の北端を壊してSK1246が掘り込まれた（図161）。SK1246とその北側のSK1247は遺構検出時に1基の土坑として認識されていたため、出土土器は一括して取り上げられている。

SK1247を除くと、いずれもさほど深さのない不整形土坑であり、後述するように大量の土器が出土していることから、SK1244～1246はそれらを投棄するための塵芥処理土坑と考えられる。

3 出土土器

SK1244～1247から出土した土器は整理用木箱に36箱分、重量で180kg以上、破片数にして10,000片を超える。

破片数計測法（接合前）と重量計測法を用いてSK1244～1247出土の土器組成を計量した。破片数では、土師

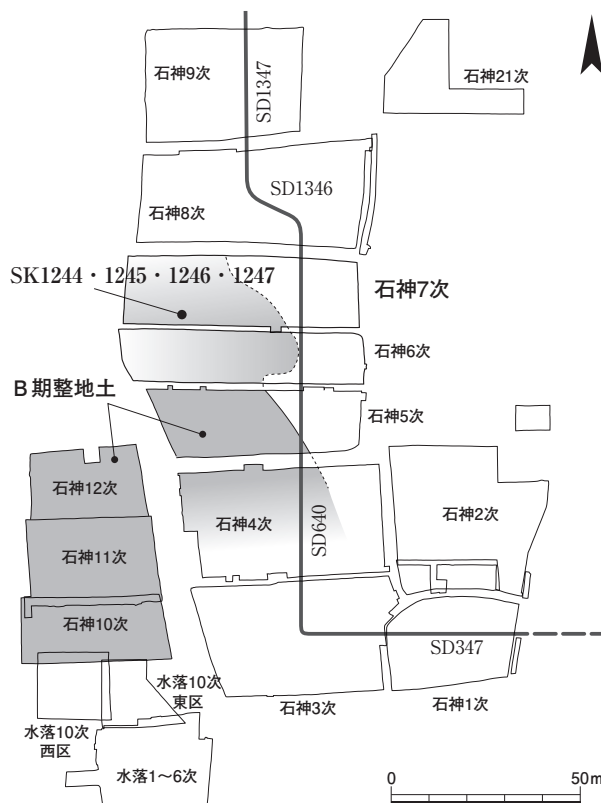


図160 B期整地土の分布とSK1244～1247 1:2000

器7,996片、須恵器2,945片、黒色土器6片と土師器が多い。土師器では食膳具が37%（2,922片）であるのに対し、煮炊具が63%（5,013片）を占めており、須恵器では食膳具が50%（1,469片）、貯蔵具が50%（1,470片）とほぼ同数である。重量は、土師器94.15kg、須恵器95.15kg、黒色土器0.15kgで、土師器のうち31%（29.01kg）を食膳具、68%（64.05kg）を煮炊具が占め、須恵器のうち35%（33.06kg）を食膳具、65%（61.98kg）を調理具が占めている。

接合作業後、復元口径の信頼度が比較的高い口縁部残存率25%以上²⁾の個体を中心に154点を図化した。

図化した154点のうち、51점에複数の遺構にまたがる接合関係が認められた。内訳は以下のとおりである。

SK1244とSK1245接合…26点

SK1244とSK1245とSK1246・1247接合…15点

SK1244とSK1246・1247接合…8点

SK1245とSK1246・1247接合…2点

SK1244とSK1245の間での接合が51点のほぼ8割に相当する41点におよんでいることから、SK1246によって分断されているが、SK1244とSK1245が本来は1基の土坑であったという可能性が考えられた。

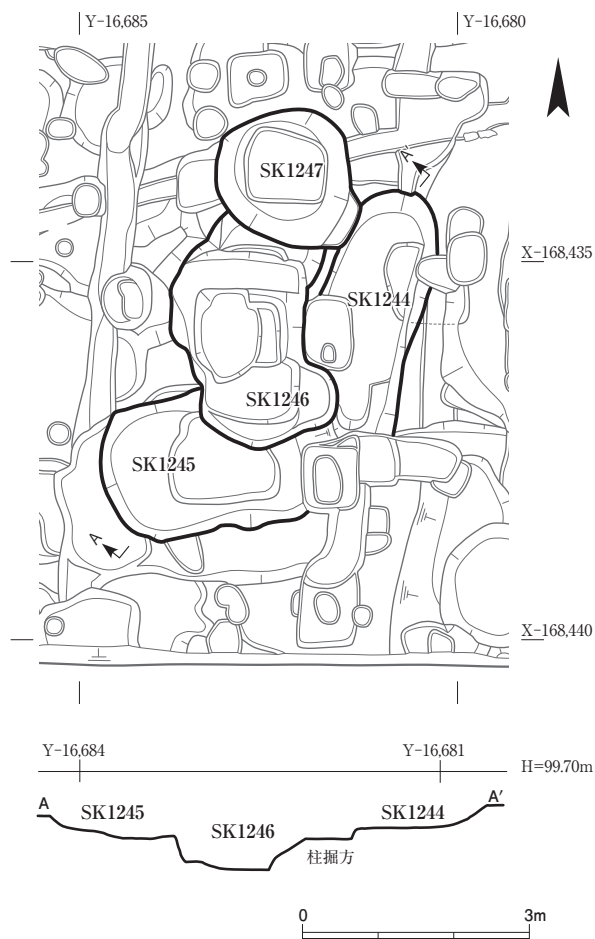


図161 SK1244～1247遺構図・断面模式図 1:100

そこで、平面図に記録されている標高の数値から、SK1244～1246の断面模式図を作成した(図161)。この図から、不整形の浅い土坑が深い土坑SK1246によってSK1244とSK1245に分断された状況を読み取ることができる。このため、SK1244とSK1245出土土器は本来同一の土坑の出土品であると判断した。

また、SK1246・1247出土土器のうち、SK1244もしくはSK1245出土土器と接合関係があるものについては、重複関係から古い土坑であるSK1244・1245に本来含まれていた土器と考えられるため、これに含めることとした(図162～166・169)。

ただし、同じくSK1246・1247出土の土器であっても、SK1244・1245出土品との接合関係が確認できなかった14点については、厳密には共伴関係にあると断言はできないため、分けて示した(図167)。

SK1244・1245出土土器 土師器には杯A、杯B、杯C、杯G、杯H、杯、皿A、台付鉢、鉢H、盤A、壺A、甕

A、甕B、甕C、甗、甗がある(図162・163)。

1・7は杯A。浅手の小型品(1)と深手の大型品(7)があり、いずれも口縁部外面をヨコナデ後にヘラミガキで、底部外面をヘラケズリで調整する。内面の暗文は二段放射。7の底部内面には格子状の焼成後線刻がある。

6は杯B。口縁部内面には連弧暗文と一段放射暗文、底部に螺旋暗文をほどこす。口縁部外面をヨコナデ後、ヘラミガキで調整する。

8・10～15は杯C。口径14.5～16.0cmの大型品(13～15)、12.5～14.0cmの小型品(10～12)に分かれる。いずれも底部外面は不調整で、内面には一段放射暗文をほどこす。8は杯Aに似た口縁部形態を呈す点が特徴的。外面全体をヨコナデ後、ヘラミガキで調整し、口縁部内面には一段放射暗文と連弧暗文をほどこす。

2・3は杯G。口径は10.5～11.5cm。底部外面は不調整。

4・5は杯H。口径12.0cm前後のもの(4)と14.0cm前後のもの(5)がある。底部外面にヘラケズリをほどこす。

9・16～20は杯Cに類似する形状だが、内面に暗文をほどこさない杯。底部外面は不調整のもの(16・20)と、ヘラケズリ調整のもの(9・17～19)がある。

21～26は皿A。底部外面は不調整のもの(21～24)と、ヘラケズリ調整のもの(25・26)がある。内面に一段放射暗文をほどこす。

27・28は鉢H。浅手のもの(27)と深手のもの(28)があり、いずれも底部外面にはヘラケズリをほどこす。

29は台付鉢。口縁部は大きく外反し、端部がわずかに内側へ肥厚する。外面に体部から底部にかけてヘラケズリをほどこす。内面の暗文は二段放射。

30は盤A。外面は体部から底部にかけてヘラケズリ調整、口縁部をヨコナデ後、ヘラミガキで調整している。内面には二段放射暗文の間に連弧暗文、底部に螺旋暗文をほどこす。

31は壺A。頸部および体部外面にヘラミガキで調整をほどこす。

32・33は甗。いずれも外面は不調整で、内面にはハケメ調整をほどこす。上半(32)と下半(33)に分けて図示したが、胎土や色調が類似しているため同一個体と考えられる。

35・36は甕A。35の内外面にはハケメ調整をほどこす。36の外面は不調整、内面にナデ調整をほどこす。

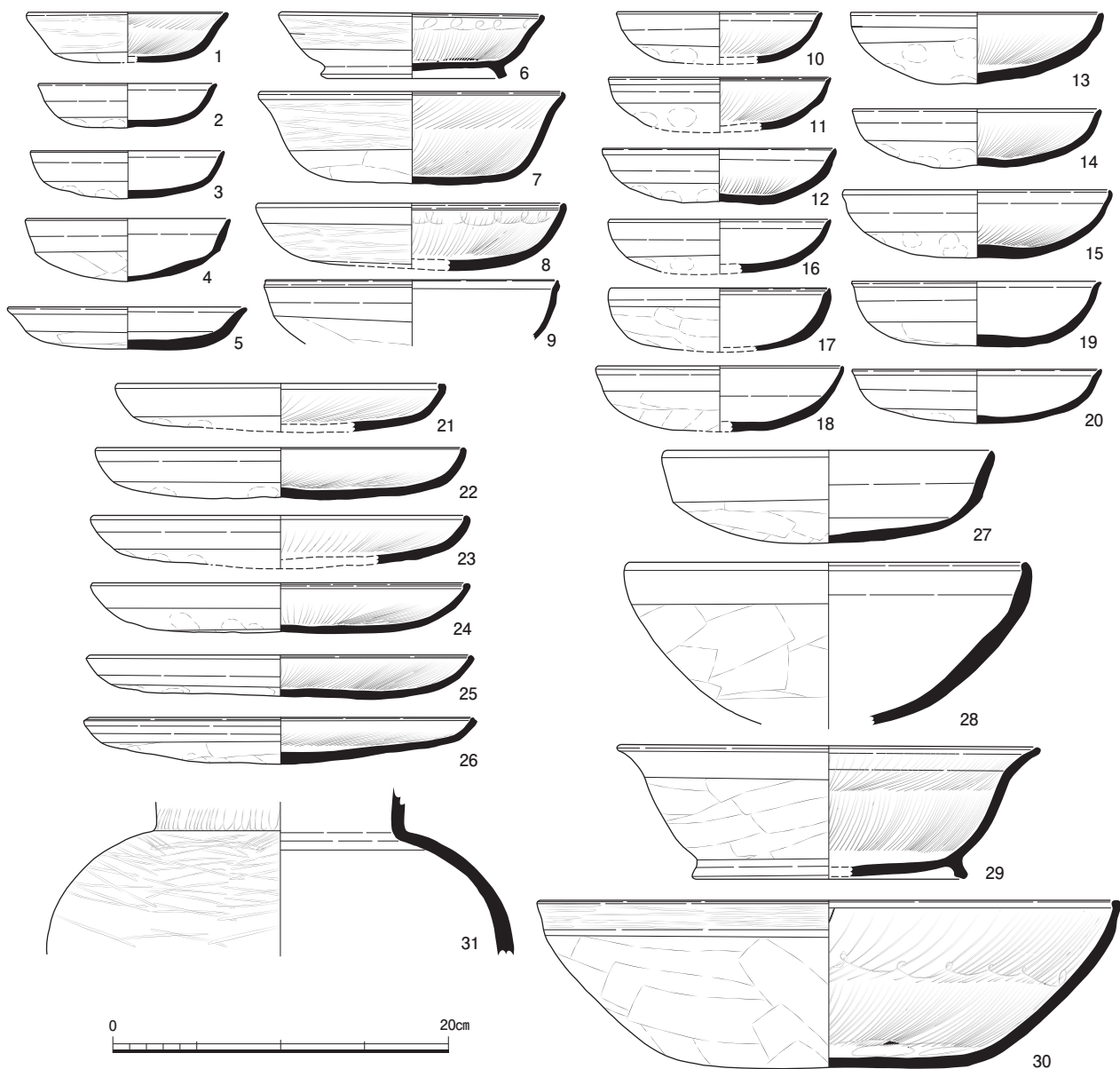


図162 SK1244・1245出土土師器 (1) 1 : 4

34は甕B。外面にはハケメ調整をほどこし、内面は不調整。体部に把手を付す。これ以外にも把手部分が多数出土している。

37・38は甕C。38は胴部外面下半のハケメが上半に比して粗い。底部外面と内面上半には炭化物が付着して黒色化している。

39～41は竈。39は廂と焚口。外面をハケメ調整した後、廂を貼り付けている。内面にヘラケズリ調整をほどこす。40は基部。外面をハケメ調整した後、下端にのみヘラケズリをほどこす。内面調整はヘラケズリ。41は廂と焚口から基部。39・40と同様の調整をほどこす。39～

41は胎土や調整が類似しているため、同一個体と考えられる。このほか、別個体の竈片が多数出土している。

須恵器には杯蓋、無台杯、杯B、無台碗、碗B、皿蓋、皿A、皿B、鉢A、高杯、盤、平瓶、横瓶、壺B、甕Aがある (図164～166)。

42～89は杯蓋。かえりをもつもの (42～60) と、かえりをもたないもの (61～89) がある。

かえりをもつ杯蓋は、外端径16.0～18.0cm (53～60)、14.5～15.5cm (47～52)、10.5～13.0cm (42～46) の3法量に分化する。44は湖西窯産である。

かえりをもたない杯蓋は、外端径18.5～20.0cm (86～



図163 SK1244・1245出土土師器(2) 1:4 (39~41は1:6)

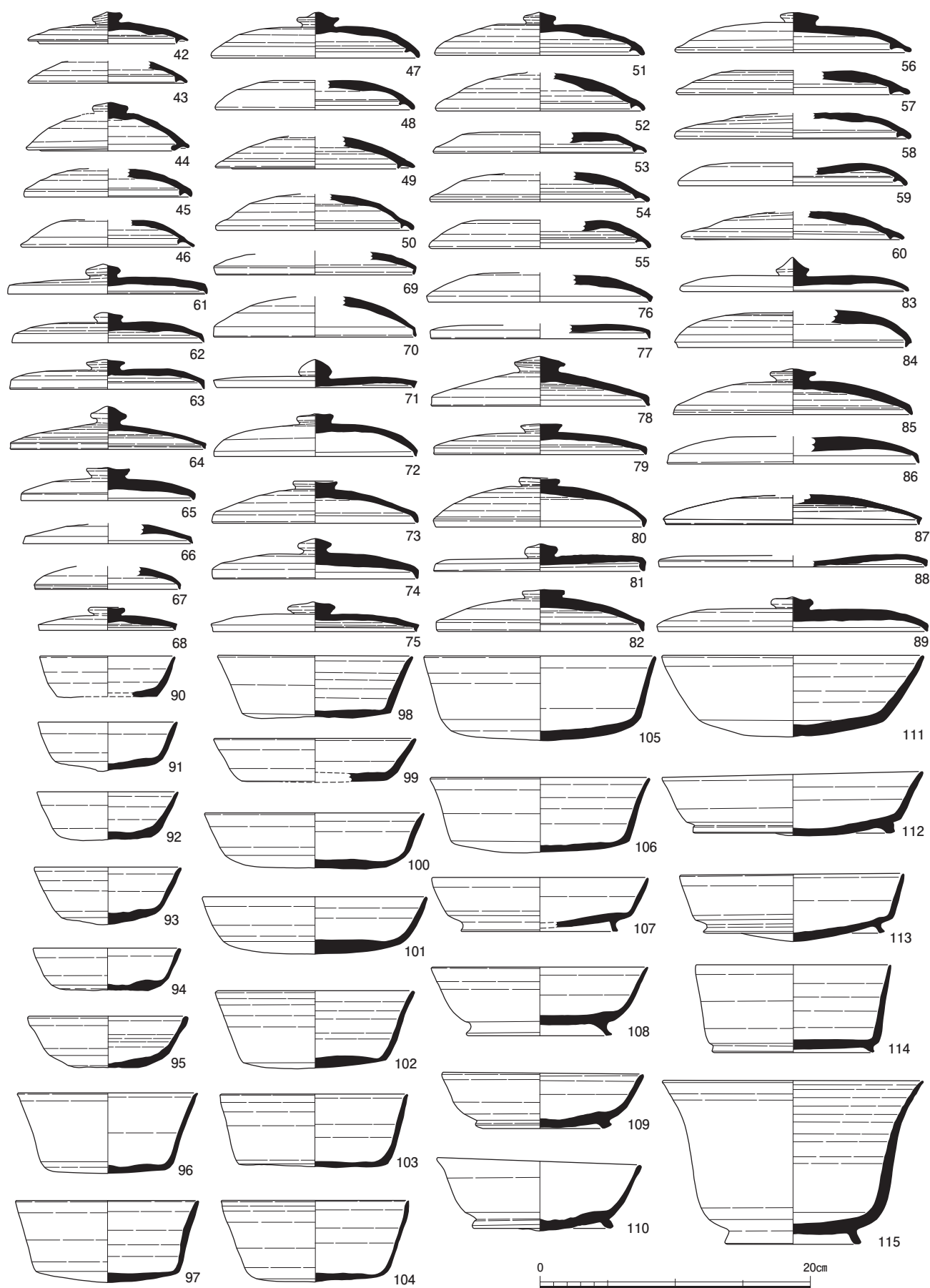


圖164 SK1244・1245出土須惠器(1) 1:4

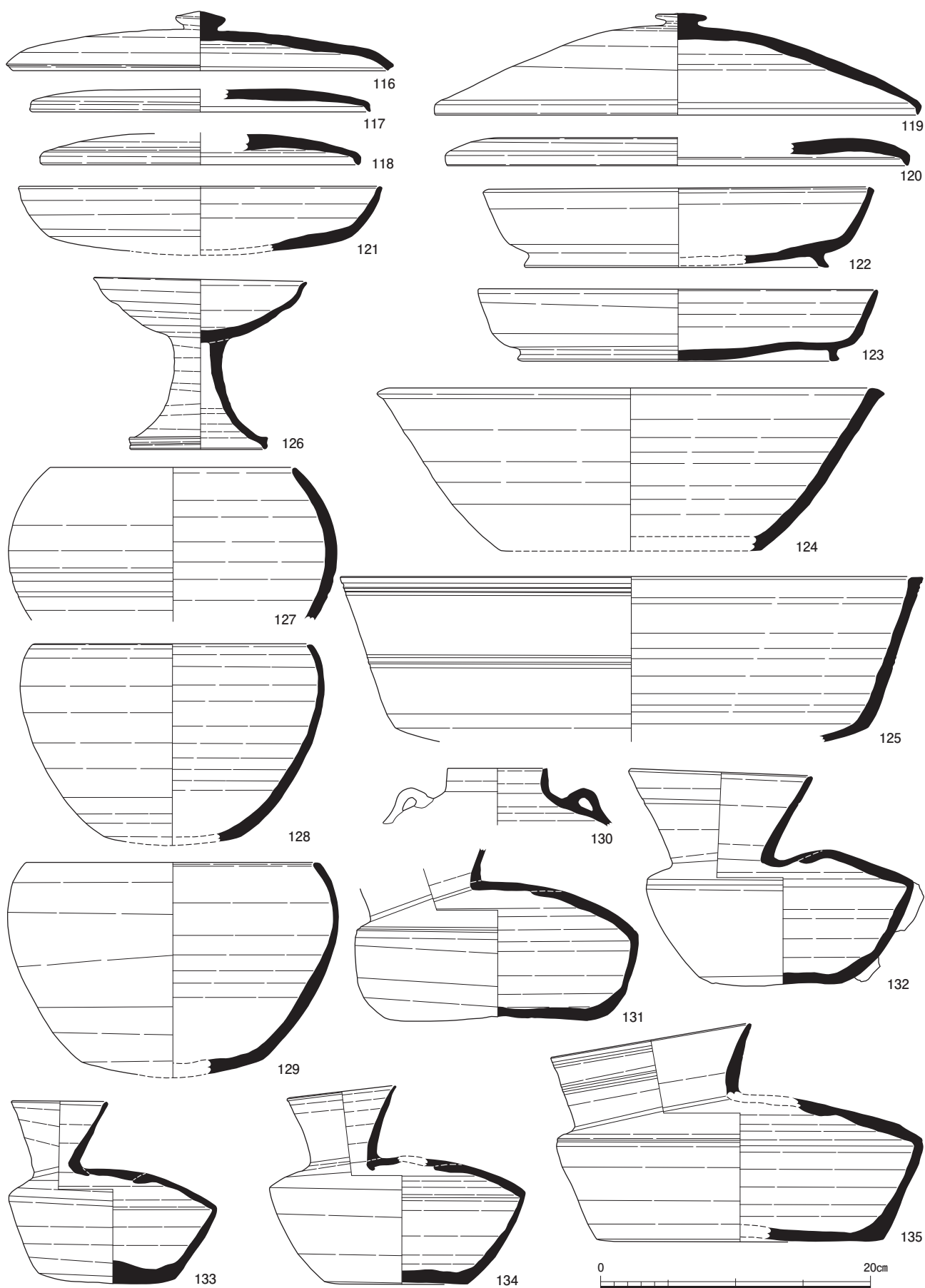


図165 SK1244・1245出土須恵器(2) 1:4



図166 SK1244・1245出土須恵器(3) 1:6 (136は1:4)

89)、16.0~17.5cm (76~81・83~85)、14.5~15.5cm (61~64・69~75・82)、10.0~13.0cm (65~68) の4法量に分化する。69・71・75・77・87が尾張産、63~65・68・80・81は尾張産の可能性はある。

90~95・98~101・105・106・111は無台杯。口径19.5cm (111)、16.0~17.0cm (99・100・105・106)、14.0~15.0cm (98・101)、10.0~12.0cm (90~95) の4法量に分化する。90~95の底部外面はヘラ切り不調整。それ以外の底部外面は

ロクロケズリ調整だが、111はロクロ回転が断続的。101は尾張産、105・106は尾張産の可能性はある。95は湖西窯産。

107~110・112・113は杯B。口径19.0cmの大型品(112)、16.0~17.0cmの中型品(109・110・113)、15.0cmの小型品(107・108)がある。107・119の底部外面はヘラ切り不調整だが、ほかの4点の底部外面にはロクロケズリ調整を加えている。112・113は尾張産の可能性はある。

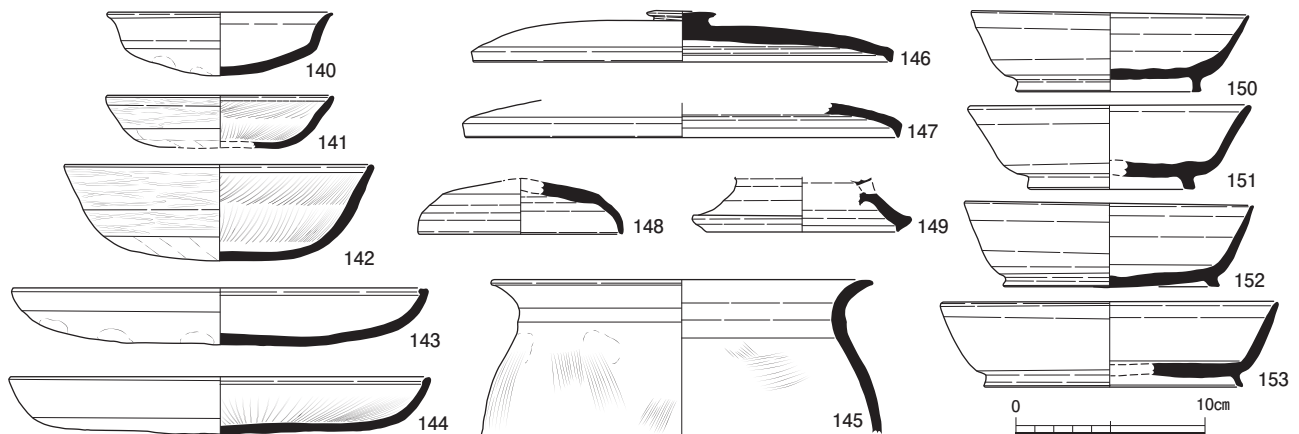


図167 SK1246・1247出土土器 1 : 4 (140~145 : 土師器、146~153 : 須恵器)

96・97・102~104は無台碗。いずれも底部外面をロクロケズリで調整している。96・102・103は尾張産、96・104は尾張産の可能性ある。

114・115は碗B。口縁部が直立するもの(114)と外反するもの(115)がある。いずれも底部外面をロクロケズリで調整する。114は尾張産である。

116~120は皿蓋。外端径20.0cm以上のものを皿蓋とした。すべてかえりをもたない。117の内面にはヘラミガキをほどこす。117・119・120は尾張産の可能性ある。

121は皿A。底部外面をロクロケズリで調整する。

122・123は皿B。底部外面をロクロケズリで丁寧に調整する。122・123ともに尾張産の可能性ある。

124・125は盤。124には刷毛による黄土塗布がみとめられる。125には口縁部と体部に3条単位の凹線が確認できる。124が尾張産、125は尾張産の可能性ある。

126は高杯。杯部は口縁部が外反し、脚端部が上下に突出する形態。湖西窯産である。

127~129は鉢A。127の体部下半には凹線が2条ある。

130は肩部に耳が付く壺B。尾張産である。

131~135は平瓶。134を除き、自然釉の降着が著しい。131の肩部に頸部取付の際、その位置の目安としてつけられた円形の線刻がある。132の胴部にはかえりをもつ蓋の破片が焼成時に融着している。133・135は尾張産。

136は横瓶。焼成は軟質、外面のタタキは不鮮明。内面には無文当て具を使用している。

137~139は甕A。いずれも胴部をタタキで成形した後、138にはカキメ調整、139には板ナデ調整を加えている。137・139の内面には無文当て具、138の内面には同

心円文の当て具を使用する。139のみ外面に自然釉が降着する。137は尾張産。

土師器・須恵器のほかには、SK1245から黒色土器の杯(図169-154)が出土しており、これについては後述する。

SK1246・1247出土土器 土師器には杯A、杯、皿A、甕Aがある(図167-140~145)。

141・142は杯A。浅手の小型品(141)と深手の大型品(142)がある。いずれの外面も口縁部をヨコナデ後、ヘラミガキ、底部をヘラケズリで調整する。内面に二段放射暗文をほどこす。

140は杯。外反する口縁部の形状は杯Hに似るが、底部が不調整である。

143・144は皿A。いずれも底部外面は不調整。144の内面に一段放射暗文をほどこす。143の暗文の有無不明。

145は甕A。胴部外面はハケメ調整。胴部内面にはハケメ調整の後、ヨコナデをほどこす。

須恵器には杯H蓋、皿蓋、杯B、台付碗あるいは壺類の脚部がある(図167-146~153)。

148は杯H蓋。口径10.8cm、尾張産である。

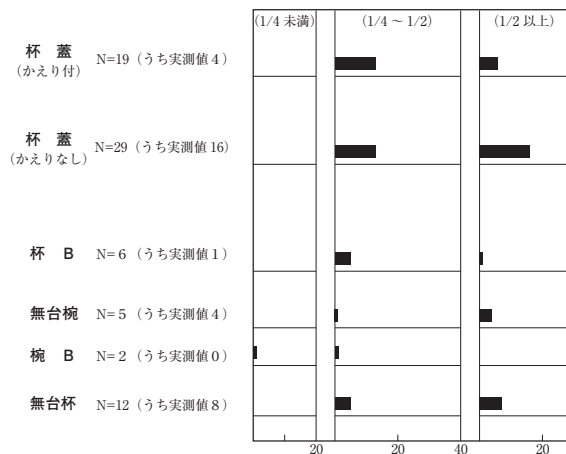
146・147は皿蓋。いずれもかえりをもたない。147は尾張産である。

150~153は杯B。口径17.8cm(153)と14.5cm~15.5cm(150~152)の2法量に分化する。150・151の底部外面はヘラ切り不調整だが、152・153の底部外面にはロクロケズリを加えている。152の底部外面に「-」の焼成前線刻がある。152は尾張産、153は尾張産の可能性ある。

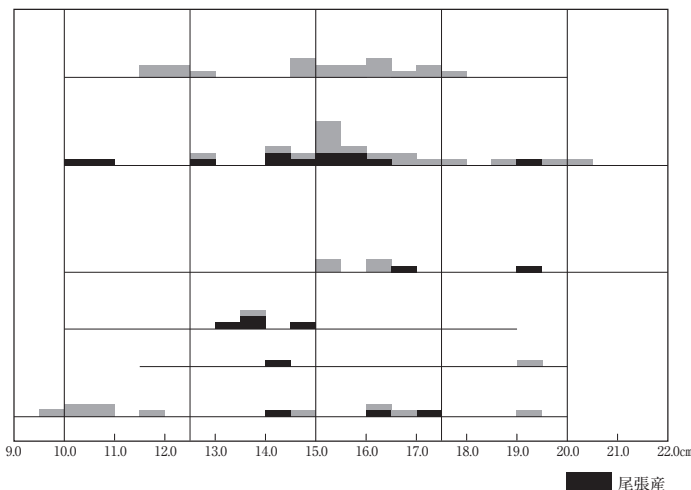
149は台付碗あるいは壺類の脚部。外面に自然釉が降着する。

標本数と実測値

標本の残存度とその割合

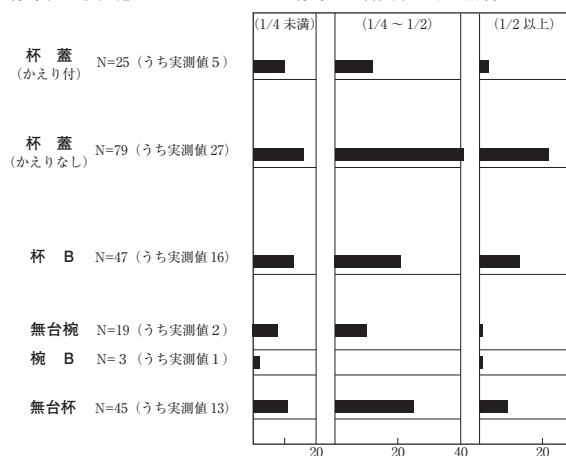


石神遺跡 SK1244・1245 出土須恵器の口径



標本数と実測値

標本の残存度とその割合



石神遺跡 SD640 出土須恵器の口径

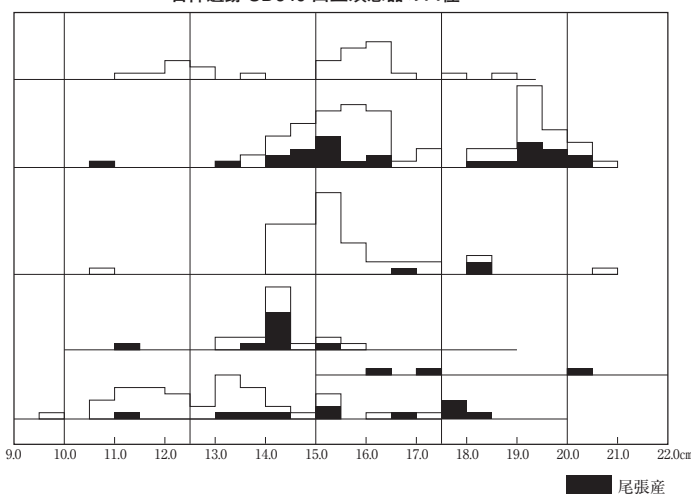


図168 須恵器食膳具の口径分布

4 SK1244・1245出土土器群の位置づけ

前述のように、SK1244・1245出土土器は量的にまとまりがあり、一括して取り扱ってよいと考えられる。ここでは、他の土器群との比較をおこない、編年的な位置づけを考える。

まず、須恵器杯・皿蓋 (N=53) にかえりをもつもの (36%) ともたないもの (64%) が併存していることから、飛鳥時代の都城土器編年³⁾における飛鳥Ⅳに位置づけることができる。また、SK1244・1245はB期整地土を掘り込んでいるため天武朝以降の遺構であることがあきらかである。

そこで、SK1244・1245と同様にB期整地土を掘り込んだ遺構であるSD640の出土土器と比較をおこなった。SD640はB期石神遺跡の基幹水路と考えられる南北溝で、出土土器は飛鳥浄御原宮から藤原宮へ遷際の廃棄物と理解されている⁴⁾。

SD640から出土した須恵器杯・皿蓋 (N=104) は、SK1244・1245出土のものと同じくかえりをもつもの

(24%) ともたないもの (76%) が併存しているが、その割合はやや異なる。この差は一見すると時期差のようでもあるのだが、飛鳥Ⅳおよび飛鳥浄御原宮期の土器群には同時期であっても遺構によって顕著な様相差が表れることが指摘されている。特に、飛鳥浄御原宮期になって爆発的に増加する尾張産須恵器の割合は、須恵器杯・皿蓋全体の中に占めるかえりをもたないものの割合と連動する傾向があると指摘されていることには注意が必要である⁵⁾。

SK1244・1245とSD640の須恵器食膳具に占める尾張産の割合を示すと、前者の出土品 (N=88) は確実な尾張産が14%、可能性があるものを含めると33%、後者の出土品 (N=193) では確実なものだけで20%、可能性があるものまで含めると38%である。

『紀要 2016』で指摘されていたように、須恵器食膳具に尾張産の占める割合が高いと、杯・皿蓋にかえりをもたないものが増える傾向がみとめられるため、両者をほぼ同時期の土器群とみなし、かえりの有無の量比を産地構成の差と考えることもできる。

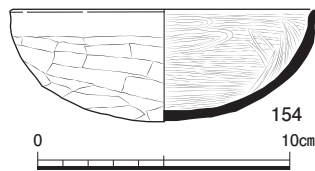


図169 SK1245出土黒色土器 1 : 3

杯・皿蓋以外の器種についても両者を比較するため、須恵器食膳具の器種別口径分布を5mmごとのヒストグラムで表した(図168)。ヒストグラムの左側は、口縁部残存率の割合を示す横棒グラフである。

SK1244・1245で杯Bの個体数が特段に少ないことを除けば、SK1244・1245出土品とSD640出土品の間には、杯蓋の口径分布に類似性を読み取ることができる。加えて両者ともに無台碗の多くを尾張産が占め、それに対応する口径の杯蓋も尾張産が多い点で共通しており、両者の間に顕著な時期差をみいだすことは困難である。

さらに、土師器についても比較をおこなった。両遺構から出土した杯Cの径高指数(平均値)を算出すると、SK1244・1245では25.1(N=7)、SD640では23.6(N=45)となる。この数値だけを見ると、SK1244・1245出土品のほうがやや深手である点に古相をみいだすことも不可能ではない。しかしながら、SK1244・1245出土品の各個体の径高指数がSD640出土品の数値の範囲内(20.0から29.0前後)におさまることを考慮するならば、SD640との明確な差は確認できない。

このように、SK1244・1245とSD640の出土土器との間には明瞭な時期差をみいだすことができず、少なくとも前者が後者より新しいことを示すような要素は認められない。

したがって、SK1244・1245出土土器の編年的な位置を、天武朝から藤原京遷都直前までを範囲とする飛鳥浄御原宮期にもとめるのは、十分に合理性があると考えられる。

5 SK1245出土の黒色土器

SK1245からは、東北地方産と考えられる黒色土器の杯が1点出土している(図169)。密にヘラミガキをほどこした内面のみが黒色化している。外面には口縁部にヨコナデ、底部にヘラケズリ調整をほどこす。

石神遺跡から東北地方の黒色土器が出土することはこ

表24 『日本書紀』における飛鳥浄御原宮期の蝦夷関連記事

年月日	記事
天武天皇11・3・乙未 (682) 4・甲申	陸奥国の蝦夷22人に爵位を与えた。 越の蝦夷の伊高岐那らが、俘囚70戸で一郡とした いと願ひ出て、許された。
持統天皇2・11・己未 (688) 12・乙酉朔 丙申	蝦夷190人余りが調を背負って誅をした。 蝦夷の男女213人を飛鳥寺の西の槻の下で饗応し た。
持統天皇3・1・丙辰 (689) 1・壬戌 7・朔 7・甲辰	務大肆陸奥国優嗜曇郡の城養蝦夷である脂利古 の息子、麻呂と鉄折が出家したいと願ひ出て、許 された。 越の蝦夷の僧道信に、仏像や仏具が下賜された。 陸奥の蝦夷の自得が要請していた金銅の仏像や 仏具が付与された。 越の蝦夷の八釣魚らに、物を賜った。

れまでも知られており、それらは『日本書紀』の斉明朝における蝦夷饗応の記事と関連付けて理解されることが多かった。

しかし、この土器は飛鳥浄御原宮期の土坑の出土品であることに加え、ほかに混入品がないことから、これだけを異なる時期の混入遺物とは考えにくい。

もっとも、『日本書紀』には斉明朝だけでなく、持統天皇2年(688)の饗応をはじめとして、飛鳥浄御原宮期にも蝦夷が飛鳥へ来訪したことを示唆する記事をいくつかみいだすことができる(表24)。

これらの記事と結びつけることには慎重であるべきだが、SK1245出土の黒色土器は、飛鳥浄御原宮期においても東北地方と飛鳥地域の間での人々の往来や、それにとりまう器物の移動があったことをうかがわせるものとして、特に注目すべき存在といえよう。(土橋明梨紗)

註

- 1) 森川 実・大澤正吾「石神遺跡B期整地土・SD640出土の土器群」『紀要 2018』。
- 2) 金田明大「土器口縁径の計測の効率化に向けた試行」『文化財の壺』文化財方法論研究会、2018。
- 3) 西 弘海「土器の時期区分と型式変化」『藤原報告Ⅱ』1978。
- 4) 前掲註1。
- 5) 尾野善裕・森川 実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『紀要 2016』。



図170 坂田寺、キトラ古墳周辺の地形図 1 : 12000